

| | |
|------------------|---|
| Title | 加田哲二著 経済価値論 |
| Sub Title | |
| Author | 阿部, 秀助 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1921 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.5 (1921. 5) ,p.755(163)- 757(165) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 新刊紹介 |
| Genre | Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210501-0163 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

り(二六〇頁)。然るに凡ての労働者をして全生産物よりその自ら作出したる全價值を收得せしめよとの積極的意味に於ける全労働收益權に至つては猶ほ細密の考究を必要とす。而してその結論を要約すれば、全労働收益權は、土地及資本の私有を承認する。今日の社會秩序とは尠齟相容れ難きものである。個別使用を伴ふ共有財産を規定する法律秩序に於ては、全労働收益權は自然的分配原理である。併し共同使用を伴ふ共有財産の行はるゝ所の共產主義的に組織された社會に於ては、全労働收益權の實行は、それ自身不可能ではないが、斯様な結び付きに對する實踐的困難は非常に大きい。従つて此の如き社會に於ては生存權が財の分配の自然的基礎と認められなければならぬ(二八二―三頁)而して「今日の社會的發展は」全労働收益權の實現よりも「多くの徴候より推して考ふれば……生存權の實行に向つて居るやうである」(二八五)と云ふに在り。

Menger は唯物史觀を是認せず。歴史上の大

傳へて遺憾なし。嘗て森鷗外博士その翻譯「審美極致論」の凡例中に記して曰く「翻譯義を謬る、以て翻譯と稱するに足らず。義を傳へて正しきことを得ば、善きことは即ち善からん。未だ美を盡せりとは謂ふ可からず。若し能く筆墨の間、作者の口吻を髣髴するに至らば翻譯の能事畢れるに庶幾からん」と。今評者は平生歐文の書を讀みて其理義を解するも、原文の趣致を味はふこと甚だ不充分なるを嘆ずるものなれば、「社會主義思想史」が果して能く翻譯の能事を盡せりや否やを云ふこと能はずと雖も「義を傳へて正しき」の一事に至ては原著を併讀したる凡ての人と共に幸に之を言明して憚らざることを得るものなり。(一)些事を指摘すれば、三四頁、府はその屬する労働者に人件費、La Hire civileより一百万フランを支給す」とあるは「王室費より一百万フランの(にあら)森戸氏は曩に雜誌「改造」(大正九年十一月號)に一文を寄せて Anton Menger の人物業績を論評すること甚だ詳細親切なりと。今氏に斯の如き良翻譯の業ある素より其處ならんのみ

(小泉信三)

事件の如何なるものも全然經濟狀態の影響を被らざるものなきも亦その如何なるものも單なる經濟狀態のみよりしては之を説明すべからずとなす(二〇九頁)と同時に近時屢々 Marxismus の精髓なりとして主張せらるゝ労働者獨裁の説に左袒せざるものなり。蓋し「社會問題は政治問題のやうに一夜の間に解決せらるべきものではない。今日の法律秩序に「必然起るべき變化は恰も吾々の今日の社會秩序が數百年の間絶えず封建制度を破壊敗し來り、結局唯一撃で以て之を全廢することが能ざる迄に至つたやうに、長き歴史的發展の方法によつて行はるべき」(二八五頁)を以てなり。而して此見解に對しては譯者森戸氏が漸く「多くの疑問を懐くに至りし」と云ふ(序文四頁)に拘らず、評者は今猶ほ之を棄つべき理由を知らざるものなり。今日一撃にして社會主義社會の實現すべからざるは猶ほ一撃にして封建制度の復活すべからざるが如しと信ずるを以てなり。

森戸氏の譯筆は周到精密原著に謂へるところ

加田哲三著 「經濟價值論」

東京國文堂發行
定價二圓五十錢

現時に於ける少壯有爲の經濟學者たる著者によりて公にせられし「經濟價值論」が熾烈なる研究心の結晶たると共に讀書界の眞摯なる要求を充分に満足せしむる勞作たることに就きては、既に高橋、小泉兩教授の序文中に裏書せられしを以て、評者は單に本書の内容に關し、之れが主要なる點を紹介し、以て著者の眞摯なる努力に報んと欲す。本書は著者が序文中に指摘せられし如く、今日に至る迄の經濟學上に於ける中心問題たる價值論に關する研究にして、其内容は前、後兩篇に分たれ、前者は著者自からの研究になる價值學說の史的研究にして、後者は奧太利學派の價值論を最も簡明精確に紹介せりと稱せらるゝ W. Smart, An introduction to the theory of Value の全譯なりとす。

蓋、現時に至る迄の經濟學の發達と價值論の發達とは略ぼ其軌を一にせるの觀あり、今假りに今日迄の經濟學を科學的構成以前の時代と之れが以後の時代とに區別し、前期に於ける價值論を以て後の時代に比する時は遙かに貧弱なりとの觀を免れず、即ち希臘、羅馬の時代に於ける價值論が頗ぶる斷片的たることは既に著者の云へるが如し、(頁一七)又中世の如きも主として *Justum Pretium* を中心として學說の構成を求めしが如し、然るに後期即ち近世に至つて此方面の研究には著しき發展を齎らすに至り、即ち十七世紀の經濟論をして十八世紀の經濟學を化成せしめしと稱せらる、*Locke* の如き、彼れの需要供給價值說に一步を進めしものと云はる、*James Steurt* の如き、或は近世經濟學の泰斗たる *Adam Smith* の如き、更に正統學派經濟學說の全伽藍を礎き上げしと稱せらる、*David Ricardo* の如き、又た彼れの勞働價值說を大成せりと稱せらる、*Karl Marx* の如き何れも此方面に對する最も顯著なる貢獻者なりとす、之

値說なるものが經濟學界に於て大なる勢力を有せしに不拘、其内容が妥協的なることは勢ひ社會主義者中より *Marx* に對する修正派なるものを生むに至りしが如く利用論者の中にも以上の利用說を以て満足すること能はざるもの輩出し、殊に米國コロンビア大學教授 *Ogden* は其雄なるものなりとす。

之れを要するに著者の現代に對する價值論觀は、之れを以て客觀、主觀兩說の折衷化せしものとなすと共に、將來、此折衷が利用へ歸るか費用へ復歸するかは今後の經濟學の取扱ふ可き問題たることを以てせり。(頁二二六)

尙ほ後篇主觀的經濟價值論は吾人が前に擧げしが如く *W. Smart, An introduction to the theory of Value* の極めて流暢なる全譯にして之れが内容は(一)新版序文(二)第一版序文(三)緒言(四)價值の解剖(五)利用と價值との差異(六)價值の階等(七)限界利用(八)限界利用再論(九)補足財(十)主觀的交換價值(十一)主觀的價值より客觀的價值(十二)價格(十三)價格の基

れを要するに *Petty, Locke* に始まる客觀的價值論は *Smith, Ricardo* を經り *J. S. Mill* に於て完成の域に達し社會主義の經濟說に於ては *Ricardian Socialism* を經り *Rodbertus Karl Marx* に於て其發達の頂點に達せりとすが著者の近世的經濟價值論の概觀となす。(頁一四三)

次に以上の兩傾向に對する反對說として利用價值說なるもの發生し、而して此方面の學說に於て特に重要視す可き人々を *S. W. Jevons, Carl Menger, Léon Walras* とす、即ち前二者は千八百七十一年に於て利用價值論を唱説し、之れに後る、こと三年にして *Léon Walras* も亦た此說を唱道せしが、其後、*Jevons* の學說は英國に於て徐々に承認せられ、*Carl Menger* の故國たる塊太利は殆んど利用價值說の祖國たる觀を呈せしものなりとす、而して *Walras* に至りては嚴密なる數學的分析を基礎として *Jevons* よりも完全なる體系を後ちの經濟學界に提供せしものなりとす(頁一八七、一九四)。只だ此利用價

礎としての主觀的評價(十四)生産費(十五)限界生産物より生産費へ(十六)生産費より生産物へ其他附録第一、第二より成り、價值論の最近傾向に就きて知らんとする人の必ず一讀す可きものなりとす。以上、吾人は著者として譯者としての加田君の勞を大となし普ねく價值論に對して興味を有する士の坐右に本書を薦めんとするものなり。(阿部秀助)

カアド原著 經濟原論

堀 經 夫 譯

岩波書店發行
四六版四五九頁
定價貳圓五拾錢

「凡そ翻譯については、謂はば印象的の譯し方と寫實的の譯し方と、二種の方法が在り得ると思はれるが、本書は、極めて神經的な寫實の寫法に據つた。」(河上博士の序文 三頁)「リカアド經濟原論」は博士の所謂「極めて神經的な寫